企業 Corporate × on-site 現場

社会医療法人恵愛会 大分中村病院

Corporate data
〒870-0022
大分市大手町3丁目
2番43号
TEL.097-536-5050

障がい者雇用の新たな可能性を模索

1966年、障がい者スポーツの父と呼ばれる故・中村裕博士により設立された大分中村病院。〝身体障がい者という言葉がこの世からなくなること〟を生涯の目標とした博士の遺志を受け継ぎ、早くから身体障がい者の雇用に取り組んできました。さらに、雇用の幅を広げたいと、2019年より精神障がい者、2022年より知的障がい者の雇用も始めました。「現在は、身体障がい2名、精神障がい2名、発達障がい2名、知的障がい1名を雇用。事務の補助、SE、看護助手などそれぞれの特性に合わせた部署で働いてもらっています」。そう話してくれたのは人事課長の山中さん。試行錯誤しながら、障がい者の新たな可能性を模索する、障がい者雇用の〝舵取り役〟です。

▲人事課 課長（企業在籍型ジョブコーチ）山中 祐子さん

▲入社して4年目の加島さん。職場の雰囲気にもすっかり馴染んでいます。

業務の切り出しを行い障がい者の業務を確保

「最初に悩んだのは障がい者の担当業務。うちは病院ですから患者さんと関わることが多く、どうしても任せられることが限られてしまうんです」。精神障がい者の受け入れを決めたものの、知識もノウハウもなかったため、まずは専門機関に相談することに。太陽の家※1から大分障害者職業センターにつないでもらい、徹底的な業務の洗い出し・切り出しを行いました。もちろん、雇用するからには障がいに対する知識も必要です。業務の切り出しと並行して、障害者職業生活相談員の資格を取得したり、各部署の所属長向けセミナーを開催したりしながら、少しずつ受け入れ準備を整えていきました。

障がい者の受け入れ準備

業務の切り出し
全ての業務を洗い出し、細分化。障がい者に任せられそうなものを切り出す

障がい者の1日の業務スケジュールを作成
大分障害者職業センターの担当者が現場の写真を撮影し、切り出した各業務の所要時間を確認。それを元に1日(6時間)の業務スケジュールを作成

障がいに対する知識を深める
- 障害者職業生活相談員の資格取得
- 各部署の所属長向けに障がい者セミナーを開催

その後、同センターから2名の精神障がい者を紹介してもらい、実習を経て、雇用が実現しました。

※1 中村裕博士が創設した、障がい者の就労支援などを行う施設

必要なのは、障がいではなくその人に合わせたサポート

雇用を始めて山中さんが感じたのは、同じ障がいでも特性は一人ひとり違うということ。「この障がいの前例がこうだから、ではなくその人に合わせたサポートが必要だと感じました。障がい名ではなく、障がい者本人を理解することが大切なんです」。そう感じた山中さんは、より専門的な目線で障がい者に向き合うことができる「企業在籍型ジョブコーチ」の資格を取得。自身の知識を深めるとともに障がい者のことをよく知る支援機関との連携にも力を入れているといいます。「毎月1回、障がい者と支援機関の面談があるので、必ず同席させてもらっています。ご家庭のことなど私たちが踏み込みにくい部分までしっかり話してくれるのでありがたいですね。心配事があれば、月1回の面談とは別に関係者を集めて話し合いの席を設けることも少なくありません。場合によっては、保護者にも参加してもらいます」。ちょっとした環境の変化などで不安定になりやすい障がい者に寄り添い、心配事があれば内部・外部の関係者と連携しながら、迅速に動く！きめ細やかな体制作りからは、障がい者を想う心が伝わってきます。

▲毎月1回、支援員と面談を行い、困りごとなどを話し合います。

企業在籍型ジョブコーチとは

障がい者を雇用する企業の社員が、企業在籍型ジョブコーチ養成研修を履修し、障がい者の職場適応のための様々な支援を行います。

- 障がいのある社員へ、職場でのコミュニケーションの取り方や効率のよい作業の進め方をアドバイス
- 上司や同僚へ、障がいに対する理解やその特性を踏まえた指導方法を提案

企業在籍型ジョブコーチの詳細は右記バーコードよりご確認ください ⟶

現場に、障がい者を支えるリーダーを配置

統括している山中さんのほか、それぞれの現場ではリーダーに任命されたスタッフが障がい者のサポートを行っています。「普段の様子は私ではなかなか見ることができませんから、落ち込んでいたり、仕事でミスが続いたり、何か変わったことがあればすぐに報告するよう伝えています。ただ、あくまで窓口、バイプ役という位置付けで、リーダーに負担がかかりすぎないように配慮しています」。加えて、障がい者の様子を知るために役立っているのが日報。「前日の睡眠時間」「今日の調子」「仕事の出来」など障がい者一人ひとりに合わせた項目を設定し、本人、同僚や上司、保護者がそれぞれ5段階で評価するというものです。何が原因でつまづいているのか、改善するためにどうしたらいいのかを話し合い、自己分析と課題解決を促します。全体を俯瞰的に見る山中さん、現場で直接支えるリーダー。両者の連携が、障がい者の成長も後押しています。

大分の医療機関をつなげ、未来を拓く

「よく医療機関での障がい者雇用は難しいといわれますが、そうとは思いません。仕事の切り出し、支援機関との連携など、やり方次第なんです。雇用前の実習で相性を見ることもできるので、健常者の雇用よりハードルが低い部分もあります。それを大分の医療機関に広めたい。障がい者雇用を行う医療機関が増え、つながり、悩みや課題を共有できれば、雇用の現場はもっと良くなると思うんです」。そのために忙しい日々の合間を縫って、障がい者雇用に関する講演依頼を受けているという山中さん。実際、講演会をきっかけに雇用を始めた医療機関もあり、想いがカタチになる日はそう遠くないのかもしれません。

自分の障がいを知り、可能性が広がった

Voice

入社4年目
加島 英大さん
ADHD
（注意欠如・多動症）

加島さんの担当業務

■総務課の事務補助
■図書整理
■リネン整理
■デジタルサイネージ作成　など

ここに入社するまでは自分の障がいを把握しておらず、普通の会社員として働いていました。ただ、何度転職しても長続きせず、何かあるのかと思い受診したところ、ADHDと診断されたんです。すぐに大分障害者職業センターに相談して、2年間の訓練を受けた後、大分中村病院を紹介してもらいました。

現在は、総務の事務補助を主に担当しています。しかし、障がい特性としてデスクワーク（じっとして行う作業）を長く続けることが苦手なので、合間に図書の整理をしたり、リネンの数を数えたり、動き回る作業を挟むなど工夫しています。

一番好きな作業は、病院1階に設置したデジタルサイネージ（電子看板）に流す画像の製作です。元々パソコン関係の仕事をしていたので得意な作業ですし、自分が作ったものを患者さんなど多くの人に見てもらえることにやりがいを感じています。今後はさらに自分にできることを探しながら、少しずつ仕事の幅を広げていきたいと思っています。

▲デジタルサイネージ

特別支援学校 vol.5

卒業後も豊かな人生を歩んでもらうために
大分県立日出支援学校

〒879-1504
速見郡日出町大字大神1618-1
TEL.0977-72-2305

細やかな面談でミスマッチをなくす

主に知的障がいの子どもたちが通う日出支援学校には現在81名（うち高等部36名）の生徒が在籍。高等部卒業後は約3割が一般就労を果たしています。「卒業はゴールではありません。その先の人生の方がずっと長いので、ある意味スタートです。だからこそ希望、特性にマッチした道に進み、豊かな人生を歩めるよう、最大限に支援したいと思っています」（進路支援主任の立山先生）。そのために1年次から担任、進路支援主任、ジョブ・コンダクター、保護者、本人の5者面談を実施。本人の気持ち、保護者の意向、生活面の課題などをすり合わせながら〝ミスマッチのない〟実習先、就職先を決めるのだといいます。また、実習に際しては就労後を想定し、公共交通機関での通勤、グループホーム利用など生活面の訓練もしっかり行なっています。

就職後も継続的な支援体制を構築

実習を経て、就職が決まった後は移行支援会議を実施します。学校、就職先の企業、相談支援事業所、市町村の担当課、障がい者就業・生活支援センターなど就労後の支援を行う関係機関の担当者が一堂に会し、就労後に予想される課題などについて共通理解を深めながら、継続的な支援体制を構築します。生徒にとっても、受け入れる企業にとっても、これほど心強いことはありません。「実習中はもちろん、就職後も3年間の追支援があるので心配はいりません。それでも不安がある場合は、ぜひ学校見学や、毎年10月に開催する事業主さんとの懇談会に来てください。実際に子どもたちを見れば障がいに対するイメージが大きく変わると思います」（坂本校長）。

現在、実習受け入れ企業は約50社。ジョブ・コンダクター大関さんの活躍により、今も少しずつ増えています。生徒たちが就職した企業の写真を見せながら、「ほら、ここも、ここでもうちの生徒が頑張っているんですよ。これからも子どもたちが根を張って花を咲かせられる就職先を開拓していきたい」と真剣に語る姿からは生徒を思う純粋な〝熱〟が伝わってきます。

▲左から進路支援主任の立山先生、坂本校長、ジョブ・コンダクターの大関さん。

▲生徒たちは様々な企業で実習を行います。
（左）繊維ロープの総合メーカー石田製網での実習風景。（右）智恵美人で有名な中野酒造での実習風景。